

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月25日現在

機関番号：84602

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320153

研究課題名（和文） 北東アジアにおける木槨墓の展開に関する総合的研究

研究課題名（英文） A general study about the expansion of the wooden chamber burial in northeast Asia

研究代表者

岡林 孝作（OKABAYASHI KOSAKU）

奈良県立橿原考古学研究所・企画課・総括研究員

研究者番号：80250380

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国漢代における木槨墓を大きく二系統の地域的枠組みで捉え、その展開過程を整理した。さらに、そうした漢内部の木槨墓の展開を踏まえて、北東アジアを中心とする周辺諸民族における木槨の受容形態に、漢との関係のあり方を反映した二つのパターンが存在することを考察した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I divided the wooden chamber burial of Chinese Han dynasty into two regional groups generally, and arranged the expansion process of these. And I considered that there were two patterns that reflected the relation method with Han empire in the reception form of the wooden chamber burial in the outskirts nations around northeast Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2010年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2011年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	10,200,000	3,060,000	13,260,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、考古学

キーワード：アジア考古学、木槨

1. 研究開始当初の背景

木槨は、その内部に木棺を納めるための木造構築物で、中国では紀元前三千年紀中頃には出現する。前漢後期になると漢の中枢部では木槨墓は衰退に向かうが、地方や辺疆地域では前漢代を通じて盛行する。

紀元前1世紀～後1世紀頃には、漢と境域を接する諸民族たとえば匈奴、夫余、拓跋鮮卑などで木槨墓の採用が始まる。朝鮮半島中西部や南部、日本列島でも2世紀代になると木槨が出現する。

日本列島における木槨は大型の弥生墳丘

墓や初期前方後円墳に採用された。最上位階層の埋葬形態と評価でき、その動態は古墳の成立過程ひいては初期国家形成期の状況を解明する上で重要な意味を有する。

研究代表者岡林は平成12年に奈良県ホケノ山古墳において古墳成立期の大型木槨の発掘調査を担当し、以降中国・朝鮮半島の資料との関係に注目しながら日本の木槨墓に関する研究を継続してきた。また、平成9年以来、断続的に科学研究費補助金の交付を受けつつ、日本および中国・朝鮮半島の木槨に関する研究を継続している。そうした中で、

弥生後期から古墳前期にかけての、棺と槨の組み合わせからなる埋葬施設の基本構造を、その系譜の淵源においては中国の棺槨（木棺・木槨の組み合わせ）との関係性において捉えるべきである、との予測をもった。

日本列島における木槨墓の存在は、中国からの影響が墓制に表出したものとして重視すべきである。一方、日本の木槨の一部には細部の構造面で朝鮮半島南部の木槨墓との共通点があったり、北方周辺民族の木槨墓に広くみられる非中国的な習俗の痕跡があるなど、実態は単純ではない。

したがって、日本における木槨の系譜を考えるためには、中国を含めた北東アジア全体を視野に入れる必要がある。本研究計画は、こうした点から着想を得て、日本における木槨を中国周縁部において展開した周辺諸民族の木槨墓の一類型として位置づけ、北東アジアにおける木槨墓全体の動態を明らかにしようとするものである。

2. 研究の目的

北東アジアの中国周辺地域では、おおむね各地域・民族の国家形成期において、中国の影響を受けて木槨墓が受容され、木槨墓あるいは木槨に類似した墓制が主墓制として一定期間盛行した後は、石室墓・石槨墓といった、より独自性の強い墓制へと転換する現象がみられる。

木槨墓は構造的に複雑で比較検討しうる要素が多く、その展開過程を考察し、地域・民族間の相互作用を考古学的に研究する材料として優れている。また、その場所の固着物（遺構）であり、かつきわめて広く分布することから、出土遺物や習俗の特徴ともからめて、多角的な検証が可能である。

本研究は、この認識に立ち、中国を含む北東アジアにおける木槨墓あるいは木槨に類似した墓制の集成と多角的な検討を通じてその展開過程を具体的に明らかにし、木槨墓の動態を通して、国家形成期の日本および周辺諸地域相互間あるいは中国との間の諸関係を総合的に考察することを目的に実施した。

3. 研究の方法

本研究計画では上記の目的のために、①木槨墓の調査データを、現地での資料収集も実施しながら集成し、地域あるいは時期ごとの構造・形状等の差異や共通点を具体的に明らかにする。②周辺地域においては中国的な様相の強弱、牛馬副葬・殉葬・毀器・火の使用など中国にはない習俗の痕跡などに留意した考古学的情報を整理・検討し、木槨墓の構造・形状等にあらわれた差異や共通点との関連性を検証する。③上記の作業を通じ、中国および中国周縁部における木槨墓の展開過

程を総合的に考察し、ひいては日本の国家形成期における木槨の東アジア史的意義を明確化する、作業を計画した。

木槨墓の資料リスト作成および現地での資料収集を含む構造・形態・出土遺物等のデータ収集は、平成21年度～平成23年度の3ヶ年で行った。

データの収集対象は北東アジアの周辺地域において木槨墓が主墓制とされた時期を中心とし、漢代を中心にその前後する時期の資料とした。地域的には、中国、北東アジアの中国周縁部（蒙古高原、東北三省、朝鮮半島、日本列島）を主たる対象とした。作業は奈良県立橿原考古学研究所において研究支援者の補助を受けて行った。

現地での資料収集（現地調査）は、平成21年度は西北大学文化遺産・考古学研究中心で実施中の東天山地方における匈奴に関する遺跡調査に関連して、新疆ウイグル自治区（平成21年8月25日～9月3日）、平成22年度は内蒙古中南部、同草原東部および大興安嶺地方における鮮卑および匈奴に関する遺跡調査に関連して、内蒙古自治区（平成22年9月20日～9月28日）、平成23年度は南北分裂以前の匈奴およびそれ以降の北匈奴に関する遺跡調査に関連して、モンゴル国（平成23年9月19日～9月27日）においてそれぞれ実施した。

研究全体の遂行にあたっては、研究代表者岡林が全体の総括を行い、資料リストの整備を岡林、研究分担者小栗・奥山が、構造・形態・出土遺物等に関する考古学的データ収集を岡林・小栗がそれぞれ中心となって行った。報告書の編集・作成は岡林が中心となり、研究分担者と協同して作成にあたった。また、研究協力者（海外共同研究者）として中国西北大学文化遺産学院教授・王建新氏、同・冉万里氏、韓国蔚山発展研究院文化財センター長・李在賢氏の協力を得た。

一連の収集資料に総合的な考察を加えた研究成果報告書は300部を作成し、平成24年3月31日に奈良県立橿原考古学研究所から刊行した。

4. 研究成果

(1) 平面プランからみた漢代木槨の地域差

漢の領域の主要部における木槨には、西方系と華中系と呼ぶべき大きな二つの地域的な「系統」（流れ）があることを、平面プランの特徴に反映した細長・幅広の差、分室方式の違いから指摘できる。

① 漢代木槨の長幅比較

漢代木槨の長幅比（長さ／幅）を検討すると、西北部の青海東部・甘粛・陝西・山西・河南北部・河北北西部・内蒙古中南部（以下「西北部」地域）では細長い平面プランのものが卓越し、中部・南部から北東部にかけて

の河南南部・湖北・湖南・江西・安徽・江蘇・山東・河北南東部・北京・遼寧・前漢中期以降の楽浪（以下「東南部」地域）では幅広のタイプが卓越する傾向がある。

その主な要因として、木槨の基本的な構造差（側板式と天板式の占める割合）、分室方式の違いが想定できる。

②「西方系」の木槨

西北部では、前漢前期に側板式の木槨が盛行し、前漢中～後期に合葬墓の流行とともに木室に転換する。側板式の木槨はそれ自体東南部では例外的な存在であり、西北部に主体的に存在した一つの木槨の流れとして位置づけることができる。この流れは西方の戦国時代秦の領域から広がったものと考えられるので、「西方系」と呼ぶ。

西方系では縦入側板式の木槨から主に槨室空間の大型化によって漸移的に木室が出現したとみられる。この点は、扉を備えた門の発達が行先して天板式の木槨から木室への移行がダイレクトに進行する東南部との大きな違いである。

前漢前期を中心とする天板式の木槨（単棺）と側板式の木槨（単棺）は、長幅比の平均がともに約 2.4 で、単棺の木槨では天板式・側板式を問わず西方系の特質である細長長方形プランを維持している。側板式の木槨（合葬）および木室では長幅比の平均は約 2.0 となり、二棺を並列に合葬する方式の導入とともにやや幅広のものに変化するが、必ずしも全体の大型化に見合うほどの幅の増大が認められるわけではない。この点にも細長長方形を基調とする西方系の木槨の特徴がよく表れている。

③「華中系」の木槨

東南部では、相対的に幅広の平面プランと複雑な分室方式を特徴とする木槨が主体を占める。このような複雑な分室のあり方は西方系の木槨にはみられないものであり、天板式であることとともに別の地域的な木槨の流れに位置づけられる。この流れは華中地域を中心とする戦国時代楚の領域から広がったものと考えられることから、西方系との対比において「華中系」と呼ぶ。

前漢前期には天板式の単棺木槨墓が東南部一帯に広く展開し、前漢中期にはこれをベースに二棺合葬墓が出現する。諸侯王墓クラスの大型墓の木槨は西北部・東南部の地域的枠組みを超えて展開したと考えられるが、現在までに知られている大型墓の木槨は天板式から木室化する華中系のものである。大型墓では前漢前期のうちに木室化が進み、その影響を受けて中型墓でも左右対称の空間配置をもつ単棺木室墓が出現するとともに、前漢中期にはその影響を受けた左右非対称の天板式二棺合葬墓が木室化したものもあらわれる。新莽期以降は磚室墓への転換にとも

ない造営数が減少するが、地域的には後漢代も造営が継続する。

華中系の天板式の木槨（単棺）の長幅比の平均は約 1.6、同（合葬）は約 1.3、木室は約 1.5 である。天板式の木槨における単棺のものと合葬のものは、後者の幅が大きく増大する傾向がある。これは、合葬の流行とともに幅を増やすことで大型化が達成されたことを示しており、木室が長さ・幅ともに増大することで大型化することと対照的である。天板式の木槨が単葬・合葬にかかわらず前漢代を通じて伝統的な分室方式を維持したのに対し、木室は内部空間の区分方式に大きな変化をともなう大型化を遂げたことも注意される。

(2) 部材のあり方からみた漢代木槨の地域差

① 底板とまくら木

底板の縦・横方向の観点から検討すると、西方系では横方向が圧倒的に多い（91%）が、華中系では縦方向が基本（70%）である。華中系では前漢前～中期の天板式の単棺墓では縦方向が大半を占め（84%）、前漢中期以降の天板式の合葬墓や木室では縦方向 55%、横方向 45% でほぼ拮抗する。

西方系の底板を構成する材は幅 20～30 cm、厚さ 5～10 cm 程度の板材が標準的である。木槨の平面プラン自体が細長いことに加え、横方向に板材を使い、かつ個々の板材の幅が狭いため、使用枚数が相対的に多い。まくら木は縦方向 2 本が基本であるが、むしろまくら木を欠く場合の方が多い。これは安定した墓壙底面を仕上げるのが可能な黄土地帯の土質に関係する可能性がある。

華中系の底板を構成する材は幅 40～70 cm、厚さ 20 cm 前後が標準的で、厚みのある重厚な板材が多い。底板の枚数は総じて西方系に比べて少ない。これは底板の材を縦方向に使うことと、個々の材が大きいことに起因する。縦方向に使用するために長い材を用意している点も見逃せない。逆に、前漢中期以降の天板式の合葬墓や木室で横方向に使うものが増加するのは、大型化に見合うだけの長い材の供給がしだいに困難化したことへの対応の結果と思われる。華中系の木槨は原則的にまくら木を有する。角材のほか、いわゆる「側面凹字形」のまくら木が華中地域で伝統的にみられ、底板を安定させるための蟻棧的な機能が考えられる。

東南部における秦～前漢前期の木槨墓では縦方向の底板が 8 割を超えるが、横方向の底板を使用する少数派として、湖北省雲夢県周辺の秦～前漢前期墓が挙げられる。これらはまくら木不使用の点でも西方系の木槨と共通する。秦の勢力拡大とともに西方系の要素がダイレクトに波及した具体例として評価できるであろう。

②柱

柱は中国の木槨構造において必ずしも不可欠の要素ではないが、西方系・華中系ともに柱を有するものが存在する。

西方系における柱配置は側板内外に沿って配することを基本とし、加えて槨室内の側板から離れた位置に配する場合も側板沿いに配された柱を含めて「十」「王」字形などの配置上の関係性を有する。これらは側板を支持・補強し、副次的に梁を介して蓋板を支える機能を有するものがある。西方系の木槨では側板や蓋板も比較的薄い板材を使うものが多く、その構造的な弱点を補うためにこうした柱構造が発達したものとみられる。

これに対し、華中系における柱は基本的に槨室内の区画施設の一部として機能し、梁などを介して上部からの荷重を支える機能を兼ねる。その比重は木槨の大小や時期によって変化するが、西方系のように側板を補強する柱の存在は基本的に認められない。

大型墓における柱は、大型化した内部空間の区画施設の構成要素から発達し、前漢中～後期には前室空間に象徴的に立ち、同時に重厚な上部構造を支持するものへと機能の重点が移行したと考えられる。また、このような柱には一定の格式を示す意義が存在した可能性があり、一部の中型墓においても象徴的に使用されるにいたったと考えられる。

③部材のあり方と用材利用

西方系と華中系の間で底板・柱のあり方にみられる違いは、それぞれ地域的な伝統性に根ざすものと考えられるが、同時に考慮されるのは用材利用の観点からの対比である。

西方系の底板の特徴は、一枚ごとの長さが短い、幅が狭い、厚さが薄い板材を横方向に多数使用していることである。これに対し、華中系の底板は、一枚ごとの長さが長い、幅が広い、厚さが厚い板材を縦方向に使用し、西方系よりも相対的に少ない枚数で底板を構成している。これは底板に限らず側板や蓋板にも一定程度指摘しうる傾向で、西方系の木槨でしばしば柱・梁を使用して側板や蓋板の支持・補強がおこなわれる点もそうした傾向に起因するものと考えてよい。

一枚ごとの材の長さの長短、幅の広狭は、使用された原木の直径に関係し、一枚ごとの材の厚さの違いは消費可能な原木の本数と関係する。すなわち、西方系の木槨は原木の節約的な消費指向が強いと判断される。

(3)漢代木槨の展開と周辺地域への波及

①漢代木槨墓の展開

漢の主要部における木槨には大きく西方系と華中系の2系統の流れがあり、ある程度の地域的枠組みを保持しつつ併存して展開した。漢の領域の西北部を中心に展開した西方系の木槨は戦国時代秦の木槨をベースと

し、漢の領域の中部・南部から朝鮮半島北部の楽浪地域までを含む北東部にかけての広い地域に展開した華中系の木槨は主として戦国時代楚の木槨をベースに発達したものと判断される。

西方系と華中系とでは用材利用のあり方にも違いがあり、西方系では原木の節約的な消費指向が強い。これは、西方系の主たる分布域が高燥な黄土地帯を主体とし、木材資源に恵まれた東南部地域とくに長江流域とは自然環境に差があることと大いに関係すると考えられる。

西方系と華中系の木槨は、全体としては単棺墓→合葬墓、木槨→木室という共通の変遷をたどる。

大型墓では前漢前期後半には墓門の完成によって回廊型木室が成立し、この影響を受けて華中系の中型墓でも前漢前期のうちに木室化が達成された。他方、西方系の側板式の木槨は本来的に横方向から棺の搬入をおこなう点で木室と共通の埋葬方式を採用していたが、墓門の発達には遅れ、主に槨室空間の大型化によって前漢中期以降木室が成立した。槨から室への転換は前漢中～後期における全土的な動きであるが、木造の埋葬施設である木槨から木室への転換の観点からは、西方系と華中系では異なる過程をたどったと評価しうる。

前漢前期に西方系の木槨が盛行した漢中枢部の長安周辺をはじめとする地域では、前漢中期以降木槨墓は急速に衰退する。その一方で、青海東部・甘肅東部・陝西北部・内蒙古中南部・山西・河北西北部などの辺疆地域では前漢後期から新莽期にいたるまでさかんに造営された。

東南部でも河南南部・河北南部・山東西部などでは空心磚墓・石槨墓・崖墓などの発達により早くから木槨墓の造営が終息する。華中系の木槨の故地であった湖北・湖南・江西などの平野部でも木槨が造営されるのは前漢後期までで、新莽期には磚室墓に転換する。いっぽう、江蘇・山東半島・遼西・遼東・楽浪などでは後漢前期にかけて木槨墓の造営が続き、とくに楽浪地域では3世紀代まで残存したことが知られている。

このように、漢代を通じて木槨墓分布のドーナツ化が進行し、その最終局面では一部の辺疆地域で地方色の濃い木槨文化の隆盛を迎えた。楽浪地域の木槨墓群はその典型的な事例といえる。

②小型単棺墓の周辺地域への展開

秦～前漢中期の漢の領域の基層には、槨室内を棺廂と前廂とに仕切板で分室し、あるいは同様の空間利用上の区分が明確な天板式の小型単棺墓が広く分布していた。規模的には長さ2～3m前後、幅1～1.5m前後で細かい平面プランが特徴である。

土城洞4号・雲城里2号墓などに代表される楽浪初期の木槨墓はこの種の小型単棺墓であり、その出現は衛滿朝鮮時期に遡る。

東北平原では漢代には簡素な木棺墓や石棺墓が主に分布するが、吉林市帽兒山遺跡のように同様の小型木槨墓が確認される。副葬品には白樺樹皮製容器、鉄矛、瑪瑙製玉類などがあり、前2～前1世紀の夫余の王族など有力者の墓と推定されている。

内蒙古地域では東北部ジャライノール墓群などで簡単な構造の小型木槨が確認されている。フルンボイル草原一帯の一連の墓群は紀元前後～1世紀の初期の拓跋鮮卑墓とされ、木棺墓を基本としつつ、そうした簡単な木槨状施設をともなうものがある。白樺樹皮製品の副葬とともに、棺槨自体にもしばしば白樺樹皮を利用し、牛や馬の頭骨や四肢骨の供献といった民族的特色がみられる。

前2世紀～紀元前後頃の周辺地域における細長長方形プランの小型木槨墓は、秦～前漢中期における中国の「基本型」ともいべき小型木槨が周辺諸民族の支配者層に受容されたものと考えてよい。衛滿朝鮮時期の朝鮮半島北西部における受容は秦による統一、夫余前期における受容は前漢武帝の拡大政策といった動向と関連するであろう。そうした中国からのインパクトを契機に受容された小型木槨が、夫余や楽浪を経由して、さらに北方の鮮卑、あるいは楽浪地域以南の朝鮮半島中・南部さらには日本列島へも順次伝播したものと考えられる。これらの地域では伝統的な主墓制はおおむね木棺墓であるが、支配者層が木槨墓を採用することで、木槨墓と木棺墓が一定の階層的関係をもって存在する状況が共通してみられる。

③北方草原地域への展開

北方草原地域の匈奴大型墓は典型的には斜坡式墓道を有する長方形プランの深い墓壙内に木槨を構築するものである。これらは前1世紀～後1世紀頃の単于を含む匈奴貴族階層の墳墓と考えられている。ノヨン・オール、ゴルモドなどで確認された木槨は内外二重で、墓壙底に縦方向の角材2本を敷いてまくら木とし、その上に横方向の板を並べて底板とする。外槨両短側板の内側、内槨の前面にそれぞれ2～3列の角柱が立つ。角柱上部には梁が架け渡され、外槨蓋板を支える。

匈奴の大型墓は墓壙および墓道の縁辺に石材を並べ、その内部を大量の石を含む土砂で埋め戻し、最終的にいわば前方後方形の低平な積石塚状とする。またフェルトの絨毯や独特の刺繍を加えた絹織物で木槨内を覆うなど遊牧民族的な特色をもつ。しかし、木槨自体の構造は漢代木槨と共通し、左右対称の空間利用や柱の配置方法は華中系の前漢中～後期の大中型墓にみられるあり方に類似している。匈奴大型墓の木槨が漢の木槨、と

くに地理的により近い内蒙古中南部・山西北部などに展開していた西方系の木槨墓ではなく、同時期の諸侯王墓に準じる華中系の大・中型墓を一定のモデルとしていた可能性は否定できない。このことは、周辺諸民族のなかでもとくに匈奴が漢と関係において特別な位置を占めていたことと関係するであろう。

(4)課題と展望

漢代の木槨は西方系と華中系の大きく二つの流れに分けて理解できた。この二系統を分ける地域的枠組みの原型は戦国時代の秦と楚の枠組みであり、その後も大きく変化することはなかった点がまず確認できるとともに、漢代を通じて木槨墓分布のドーナツ化が進行したことが注意される。

そうした漢内部の木槨墓の展開を踏まえて北東アジアにおける周辺地域への木槨墓の波及を考えると、大きくは二つのあり方に整理が可能である。

第一は、とくに秦～前漢中期において、両系統の分布圏を越えて基層に広く展開していた小型木槨墓の展開である。これらは秦漢帝国による中国統一のインパクトに対応して周辺諸地域に波及し、それがさらに遠方の地域に波及するという、段階的な伝播を想定できる。具体的には、前漢中期までの扶余、衛滿朝鮮への伝播、楽浪地域での盛行と、さらに内蒙古東北部、朝鮮半島中西部への展開が認められた。第二は、北方草原地域の匈奴貴族墓の木槨が、漢の諸侯王墓に準じる華中系の木室を一定程度直接的に移入したものである可能性である。

両者の違いは、受容の主体となった民族と漢との関係性の差を反映したものと考えられる。その場合、2世紀の朝鮮半島南部や日本列島における木槨墓の受容のあり方は前者のケースであって、かつさらに間接的な伝播として位置づけられるであろう。木槨という埋葬施設の形式が受容されても、各地域ごとに一定の変容が認められるのであるが、朝鮮半島南部や日本列島において変容の度合いが大きいことはある意味必然的である。そのことが、これらの木槨の直接的なルーツを考える上での課題であり、それを十分踏まえた検討を今後も続ける必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 岡林孝作、古墳時代の棺とその歴史的意義—木棺、日本考古学協会2010年度兵庫大会研究発表資料集、査読無、2010、pp.311—326

- ② 小栗明彦、韓蒙共同学術調査団による匈奴墓発掘調査例の覚書、堀田啓一先生喜寿記念献呈論文集、査読無、2011、pp.201-212

〔学会発表〕(計1件)

- ① 岡林孝作、古墳時代の棺とその歴史的意義—木棺、日本考古学協会2010年度大会、2010年10月17日、兵庫県立考古博物館

〔図書〕(計1件)

- ① 岡林孝作、奈良県立橿原考古学研究所、北東アジアにおける木槨墓の展開に関する総合的研究(平成21年度～平成23年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 『北東アジアにおける木槨墓の展開に関する総合的研究』研究成果報告書)、2012、65頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡林 孝作 (OKABAYASHI KOSAKU)
奈良県立橿原考古学研究所・企画課・
総括研究員
研究者番号：80250380

(2) 研究分担者

小栗 明彦 (OGURI AKIHIKO)
奈良県立橿原考古学研究所・調査課・
主任研究員
研究者番号：30250385
奥山 誠義 (OKUYAMA MASAYOSHI)
奈良県立橿原考古学研究所・企画課・
主任研究員
研究者番号：90421916

(3) 連携研究者

橋本 裕行 (HASHIMOTO HIROYUKI)
奈良県立橿原考古学研究所・事業計画課・
課長
研究者番号：80270776
米川 裕治 (YONEKAWA YUJI)
良県立橿原考古学研究所・調査課・
主任研究員
研究者番号：60332459